

第1回 NITS 大賞（平成29年度）エントリーシート

鹿児島県薩摩郡さつま町立盈進小学校

C-21

【活動名】 学びの組織活性化プロジェクト

解決すべき課題：

科学技術の急速な進歩，国際化，情報化，価値観の多様化など，変化の激しい社会において自らの知識や技能などを駆使しながら，さまざまな課題についてその解決の方向性を主体的に判断し，解決していく能力や資質を育成していくことは重要である。しかし，本校の学力についての課題を全国学力・学習状況調査の結果からみると，依然として複数の内容を含む文章中の語句の役割や相互関係を理解すること，調べて分かった事実に対する自分の考えを理由や根拠を明らかにして書くことなど，「活用」に関する記述式問題を中心に課題があるとされる。

このような現状の中，本校の解決すべき課題として以下の二つを上げることとした。

- (1) 教職員を対象とした課題として，魅力ある授業を実践するための校内研修体制の改善
- (2) 児童を対象とした課題として，記述力の育成

目的や背景：

本校の学力向上に向けた体制整備等について，連携団体（鹿児島大学教育学部，県総合教育センター，県教育委員会）による協力・支援を受け，推進するとともに，その実践内容及び成果を普及することを目的とする。その内容については以下のとおりである。

- (1) 教職員を対象とした課題について・・・「校内研修体制の改善」
 - ア 校内の学力向上推進体制の整備（校内業務改善を含む）
 - イ 各種学力検査等の効果的な分析と活用
 - ウ 教員の指導力向上（指導主事等による授業・校内研修での指導助言，評価問題の活用）
- (2) 児童を対象とした課題について・・・「記述力の育成」
 - 言葉による見方・考え方を働かせ，言語活動を通して，国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
 - ア 日常生活に必要な国語について，その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
 - イ 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め，思考力や想像力を養う。
 - ウ 言葉がもつよさを認識するとともに，言語感覚を養い，国語の大切さを自覚し，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

活動内容：

校内研修の在り方や校内研修研究授業での指導案検討からの指導・助言を受けることにより，より充実した研修が深められた。

- (1) 教職員を対象とした課題について・・・「校内研修体制の改善」
 - ア 学力向上推進委員を校務分掌に位置付けるとともに，担当者の役割を明確にするなど校内体制の整備を図った。
 - イ 課題の解決策を具体的にするために課題分析を十分に行った。
 - ウ 校内研修の充実を図った。
 - (ア) 校内研修の在り方について助言
 - (イ) 指導主事等による授業や指導案への助言
 - (ウ) 評価問題の活用促進
- (2) 児童を対象とした課題について・・・「記述力の育成」
 - ア 学習過程の工夫（基本的な学習過程）
 - (ア) 言語活動の充実
 - (イ) 「学び合い」（協働的な学び）の場の確保
 - イ 学習形態の工夫（「ひとみ学習」（一人で 友達と みんなで），ペア・グループ学習の進め方）
 - ウ 指導計画の工夫（課題解決的な単元構想）
 - エ 実態調査
 - オ 言語環境の整備（国語コーナー，教室や廊下設営等）

【校内研修の在り方についての助言】

- 1 校内の学力向上推進体制の整備
 - (1) 校務分掌上の役割
 - (2) 役割を担う教員を中核とした体制のイメージ
 - (3) 校内研修の計画
- 2 各種学力検査等の効果的な分析と活用
 - ・ 全国学力・学習状況調査，鹿児島県学習定着度調査の活用（自己採点・分析体制・Web システム活用）
- 3 積極的な仕掛け
 - (1) 若手の考えも発表する機会の創出
 - (2) 教科部・学年部の活性化
 - (3) 時間の有効活用（教室に向かうまでの間，共同作業）

活動の成果： それによって、どんな成果が得られましたか？

- (1) 校内研修体制
 - ア 校内研修における研修課題が明確にされ，改善することによって一人一人が課題意識をもって研修に参加することができるようになった。
 - イ 研究推進委員会及び学びの組織プロジェクトチームの連携により，より細部にわたって研究内容を周知することができ，実践につながった。
- (2) 授業実践
 - ア 協働的な学びの時間を意図的・計画的に取り入れ，学習形態を工夫することにより，より質の高い内容の記述力を付けることができた。
 - イ 言語環境を整えることにより，児童自ら，言語及び表現力を意識した学習を展開することができた。

アピールポイント（アイデア）

- (1) 鹿児島大学教育学部，鹿児島県総合教育センター，鹿児島県教育庁義務教育課と本校職員の連携により，より専門的な研究を授業をとおして実践し，児童の記述力の育成を図ることができた。
- (2) 若手からベテラン教職員までそれぞれの立場に立った積極的な研修を進めることができた。
- (3) 全職員が指導案作成をともなう授業実践を行い，共通実践事項を策定することで，全職員が積極的に授業研究に臨むことができ，そのことによって，授業改善を図ることができた。

(別添資料)

学びの組織活性化プロジェクト

さつま町立盈進小学校

本校では、学びの組織プロジェクトにおいて今年度4回の連携団体による講師派遣を経て、校内研修体制等の改善を図ってきた。

1 学力向上推進委員会の校務分掌への位置付け

各学年部より1名の学力向上推進委員を選出し、各学年の学力向上対策の中心的な役割を担う。研究推進委員会と学年部会の中に学力向上推進委員会を置くことにより、より細部にわたって研究内容及び共通実践内容の共通理解ができるようになった。

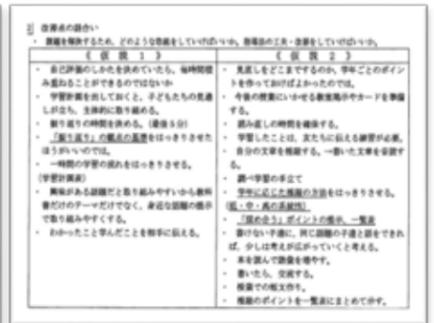


2 校内研修の活性化

(1) 一人1回の研究授業の実施

研修内容が職員に周知され、共通実践事項等が確認された後、各学年部で略案を作成し、全ての担任による研究授業を実施した。

学年部で指導案を作成することにより、経験年数の少ない職員も積極的に授業づくりに参加でき、充実したものになった。授業実践では学年部の相互参観及び授業研究を通して、学年部の重点課題に対する共通実践事項を決定し、実践することができた。



ここでは、「児童による授業の振り返りの観点が必要である。」
「学年の系統性を考えた推敲の方法をはっきりさせるべきである。」
「深め合い(協働的な学び)のポイントを掲示する。」等の共通実践事項が確認された。

(2) 授業研究の充実

今年度、本校では細案を使った研究授業を8回実施してきた。その中で2回の授業について鹿児島大学教育学部、県総合教育センター、県教育委員会からの講師派遣を受けて研修を行うことができた。



国語科における記述力の育成について専門的なアドバイスを受けることができた。また、授業改善につながる授業研究の進め方についても、授業研究の内容を明日からの授業改善に確実に生かせる授業研究のサイクルを確認し、実践することができた。



3 記述力の育成

(1) 実態の分析

本校児童の全国学力検査の結果を右のように分析した。特に正答率の低かった問題について、出題の趣旨、学習指導要領との関連、学校での取組、家庭での取組についてまとめ、実態を把握するとともに、授業改善を図った。

【表】記述力育成の実態分析

問題番号: 国語科 5年 記述力育成 (2019年度)

正答率: 37%

問題分析: 問題文が長い。問題文の趣旨が不明確。学習指導要領との関連が不明。学校での取組が不明。家庭での取組が不明。

対策: 問題文の趣旨を明確にする。学習指導要領との関連を明確にする。学校での取組を明確にする。家庭での取組を明確にする。

【学年部で作成した指導案(略案)】

授業実践後、全職員で授業実践報告会を開いた。ここでは、各学年部で仮説検証における指導の手立てを講じたことでのどのような成果や課題が見られたかを報告しあうことができた。また、出された課題を解決するためにどのような取組が必要か、指導法の工夫・改善について共通理解が図られた。

